

【選評】
国際大学特任教授
田所昌幸

歴史といまが交錯する 魅惑の知的空間 「高坂政治学」の磁場を語る

田所 通常の書評スタイルとは異なり、先生の指導を受けた評者が、思いついた話も交えながら、本書を紐解いてみたいと思います。ただし、師と弟子という関係上、対象を十分には客観視できない点があるかもしれません。

——本書は一九九〇年一〜六月に、高坂先生が新宿・紀伊國屋ホールで行った連続講演を書籍化したものです。
田所 頁をめくると久しぶりに先生の肉声が想い出されて、感慨深いものがありました。先生は「遊び」を大切に



歴史としての二十世紀

高坂正堯・著

新潮社／2023年11月／1760円

する人で、本書からは彼がいかに歴史を楽しんでいたかが伺えます。「おもしろいから歴史をやるんや」と先生はよく言っていました。

九〇年の前半というと、ベルリンの壁は前年に崩壊しましたが、ソ連はまだ存在しており、果たして冷戦が終結したのか、まだ多くの人が確信を持っていないような時期でした。日本に目を向けると、バブル経済の絶頂期にあり、多くの日本人が日本の国力に自信を持っていました。外交上の最大の懸案は日米貿易摩擦で、そのあまりの激しさに、日米関係の将来を危惧する声が高まっていたほどです。他方で湾岸危機（九〇年八月）は発生しておらず、後の「国際貢献」をめぐる外交的挫折は、まだ知りません。

以上でわかる通り、これら一連の講演は、まさに時代の過渡期に行われたものです。その後の展開を知るわれわ

れとすれば、このような過渡期における分析が現在もなお読むに値することは、同時代の数々の外交評論と読み比べて、本当に驚かされます。

「平和」への懐疑

——どのような点で、現在でも読む価値があるとお考えになりますか。

田所 思いつくままに、私が面白いと感じた点をいくつか申し上げます。

先生は、「平和」というものに対して、いささか懐疑的な視点を持っています。その意味するところは複雑ですが、一つは、世界がこの後、長きにわたって平和を維持できるだろうか、という疑念です。東側陣営の崩壊で地政学的な対立が後退したとはいえ、それで人類が戦争を放棄するほど賢くなったとは思えないし、国家が存在する限り、パワーポリティクス構造そのものがあることではない、というのが先生

の認識だったのでしょう。先生はこの頃、「これでしばらくは戦争はなしやな。しばらくやで。三〇年やな」とおっしゃっていました。

それは、後のフランス・フクヤマ的な発想とは真逆であり、当時の国際政治学コミュニティで盛んに論じられた「主権国家システムの衰退」や「地域統合の時代」といったリベラルな知的潮流とも一線を画すものでした。その意味では、当時の高坂先生は時代に逆行する存在であり、人によっては「保守反動」に見えたでしょう。

付け加えると、本書で最も印象的な発言の一つは、「ロシアに大国をやめろと強制することはできない」（四七頁）というフレーズです。第一次世界大戦の文脈で話された言葉ですが、ソ連崩壊後のロシアの混乱、NATO東方拡大、そしてウクライナ戦争に至る経緯を知るわれわれにとっては、なに

やら予言的で、ハッとする指摘です。

——そのような思考のルーツはどこにあったのでしょうか。

田所 高坂先生のクラシックな国際政治観は、まさに先生の研究が一九世紀欧州の「古典外交」を起点としていることに由来するのでしょうか。それゆえ先生は、冷戦のただ中であつた戦後日本においても、冷戦の教条的思考に囚われないで済みました。だから、冷戦が終結したからといって、それで「世界が劇的に変わる」とは考えていなかったはずです。

——平和そのものに対しても、ややシニカルな見方を感じます。

田所 平和への懐疑について、もう一つの論点は、平和な時代は政治家を平凡にするという指摘です。本書の二〇七頁からは、明治維新の政治家が死と隣り合わせの状況で、筋を通しながら権謀術数を駆使する姿と比較し

て、現在の政治家を「スケールは小さく、せいぜいが並でしょう。良いこともしませんけど、悪いこともしていない、せいぜいがリクルート事件程度です」と冷ややかに見ています。一九世紀中葉の英国に対してもそうです。

しかし平凡な政治家は、重要な政治決断を誤ったり回避したりすることで、結局は世界を不安定にする——第一次世界大戦へと至る過程を、先生はどのように論じています。

また別の場所では「平和な時代には、小さな正義が横行して、政治はむしろ退屈なものになる」という趣旨の発言を聞いたことがあります。その文脈で、「これからは歴史認識や嫌煙権、反捕鯨といったことが問題になるかもな」とも話していました。国家の存亡をかけた政治は後退し、経済や歴史問題など、重要でないとは言いませんが、本来であれば外交の最優先事項ではない

イシューが前面化する。だからといって戦争をすべきだということではないですが、平和にはそういう厄介な面もあることを指摘しています。

——日本に対する評価は控えめですね。

田所 国力の絶頂期にもかかわらず、先生は日本に対し、少なくとも国際政治のプレイヤーとしては、あまり期待していませんでした。それは日本の地政学的な基本条件や、外交経験の不足だけではなく、「ちつぽけな良心」(二二〇頁)を大事にする日本人の気質にも関係あるのでしょう。現在の日本はそこから何か変わったのか。先生の見解を聞いてみたいですね。

——軍事力については、その役割を過大視する危険性を指摘しています。

田所 先ほどのロシアの話につながるかと、先生はロシアが大国であることを無視できないと考える一方で、ロシア(ソ連)脅威論については、相当醒め

た見方をしていました。冷戦期にいわゆる軍事的リアリストがその文脈で日本の防衛力拡充を声高に叫んでいたが、高坂先生は批判的でした。「ソ連の力は、そんな大したものじゃない」という感じで、ソ連は相当無理をして軍拡をしており、それが国力のバランスを崩しているという見立てです。

先生は、軍事力の果たす役割について、その重要性を認識しつつ、比較的限制的な評価をしていました。本書にも第一次世界大戦の話の中で、「戦争は腕力で片をつけられるはずだ」という考え方が、世界中で強くなっていました。第一次世界大戦の長期化は、まさにそこに遠因があるのかもしれない」(二二頁)と述べています。

文明論からみた国際政治

——最終章のタイトルは、「異なる文明との遭遇」です。

田所 世界は決して均質ではなく、人間の思考や言動、ひいては国家が行うさまざまな政治的判断は、「文明」や「国民性」に規定されるところが大きい、

というのが彼の見方です。冷戦終結後の論壇で話題になった「歴史の終わり」(F・フクヤマ) 対「文明の衝突」(S・ハンチントン)の構図になぞらえれば、どちらかと言えばハンチントンの議論に親和性があります。

しかしそれは、「文明の衝突」が必然だという決定論ではありません。むしろ先生としては、各国がさまざまな「知恵」——これは先生が外交を語る時に好んで用いる言葉でした——を使い、共通項を見出して国家間の対決を抑制する、多様な文明を共存させる、それこそが国際政治の本質だと考えていました。人間同士、対立する部分があれば、わかり合える部分もある——彼は国際政治の限界と希望の両面を見

ており、本書からもその微妙なニュアンスが読み取れます。

——文明論に関連して、本書ではその衰亡についても語られています。

田所 イブン・ハルドゥーンや『平家物語』を引用しながら論じていますね(二二二頁)。「盛者必衰」で、栄える文明もいつかは滅びます。

ただし重要なのは、滅びる前に何をするかでしょう。その点で、本書の最後が、バリ島のすばらしさを世界に知らしめたヴァルター・シュピースというロシア系ドイツ人のエピソードで閉じられているのは印象的です。偉人でも有名でもない一人の「変わり者」が、世界の何かをえていく——クリエイティブなものは往々にして変わり者から生まれるのであり、それを許容する社会でなければいけない。では、果たして日本はどうか。日本の命運は、世界にコミットしようとする「変わり

者」が出てくるかどうかにかかっている。それは高坂先生の警句であり、希望でもあったのだと思います。

——無いものねだりですが、中国に関する話をもう少し聞いてみたいと思いました。

田所 先生は中国の重要性は十分に認識されていて、これは君たちの世代の課題だよと言われたのを覚えています。ただ、一九九〇年当時の中国は現在からは想像できないほど国力が小さかったですね。また中国が、欧州の古典外交の世界とはかけ離れた行動様式を持っている国だということも、関係しているかもしれません。

中国以外にも、ウクライナ戦争のこと、分断する米国のことなど、講演の壇上にいる高坂先生に、未来から質問したいことはたくさんあります。それだけ知的刺激に満ちた本だということでしょう。 ● (構成 小南有紀)